

図一 3 評定尺度Ⅰに基づいて作成した自己評価票<評定尺度Ⅱ>  
(小学校用)

		年 組 番 名まえ					
し つ も ん		1～5の中で、自分の思うところに○をつけてください					
あ	あなたは、毎日のせいかつやべんきょうの中で、ふしぎに思ったり、なぜだろうと思うことがありますか	A	1.まったくない	2.たまにある	3.ときどきある	4.だいたいある	5.いつもある
い	あなたは、ふしぎに思ったり、なぜだろうと思ったことを、自分からすすんでらべようと思いますか	B	1.まったく思わない	2.たまに思う	3.ときどき思う	4.だいたい思う	5.いつも思う
う	あなたは、こまったことやめんどろなことも、あきらめないでやれると思いますか	C	1.まったくやれない 1.と思う	2.たまにやれる 2.と思う	3.ときどきやれる 3.と思う	4.だいたいやれる 4.と思う	5.いつもやれる 5.と思う
え	あなたは、べんきょうすることに、うれしさやたのしさを感じていますか	D	1.まったく感じない	2.たまに感じる	3.ときどき感じる	4.だいたい感じる	5.いつも感じる
お	あなたは、べんきょうやしごとをするとき、めあてをきめておこなっていますか	E	1.まったくきめない	2.たまにきめる	3.ときどききめる	4.だいたいきめる	5.いつもきめる
か	あなたは、べんきょうやしごとをするとき、これからさき、どうしたらよいかを、よそうしながらおこなっていますか	F	1.まったくよそうしない	2.たまによそうする	3.ときどきよそうする	4.だいたいよそうする	5.いつもよそうする
き	あなたは、べんきょうやしごとをするとき、自分でくふうしたり、みんなのいけんをとり入れたりして、おこなっていますか	G	1.まったくしない	2.たまにする	3.ときどきする	4.だいたにする	5.いつもする
く	あなたは、べんきょうしたことを、つぎのべんきょうに、うまくやくだてることができますか	H	1.まったくできない	2.たまにできる	3.ときどきできる	4.だいたいできる	5.いつもできる
け	あなたは、よいこととわるいことがわかり、正しくどうできますか	I	1.まったくできない	2.たまにできる	3.ときどきできる	4.だいたいできる	5.いつもできる
こ	あなたは、自分のしごとややくわりを、きちんとおこなっていますか	J	1.まったくおこなわない	2.たまにおこなう	3.ときどきおこなう	4.だいたいおこなう	5.いつもおこなう
さ	あなたは、学きゅう会の話し合いや、いろいろなしごとをするときに、みんなのことも考えて、すすんでかつどうしますか	K	1.まったくそうしない	2.たまにそうする	3.ときどきそうする	4.だいたいそうする	5.いつもそうする
し	あなたは、家や学校がたのしく、毎日きぼうをもってせいかつしていると思いますか	L	1.まったく思わない	2.たまに思う	3.ときどき思う	4.だいたい思う	5.いつも思う

\*「あ～し」の項目は、評定尺度ⅠのA～Lに対応している。対象が小学校であるためこのようにした。

(2)自己教育力が育成された状態像 (評定尺度 I・II) の作成

自己教育力育成研究を行う中で、最も重要なことは、自己教育力が育成された子供の姿はどのような状態なのか、目指す姿が明確になっていなければ、指導の手だてが講じられない。そのため、自己教育力育成研究委員会においては、このことに着手した。その結果は、図一 2 の通りである。作成にあたっては、まず、前述の現状分析をもとに、自己教育力が育成された人間は、『主体的に変化に対応できる個性的な人間』であることを最終到達目標とし、その下位目標として『自ら学ぶ意志・態度・能力の形成』をあげ、これを支える概念として、『学習意志の形成』、『学習の仕方の習得』、『生き方の探究』の3つの柱を立てた。

ここまでは、現時点での教育界における共通見解であるし、ほぼ異論のないところと思われるが本研究の特色は、これら3つの柱のそれぞれについて、達成目標を設定することから出発していることである。

学習意志の形成では、A～D、学習の仕方の習

得では、E～H、生き方の探究では、I～Lを設定した。そして、A～Lの各項目について、自己教育力が育成された状態像を5段階に分け、5の段階を自己教育力が育成された最も望ましい状態とし、以下4, 3, 2, 1と規定した。

なお、この図一 2 の最終的な評定尺度の作成までの間に、県内数校で予備調査を行い、加除修正を何度もくり返してきた。まだまだ議論の余地を残していることは事実であるが、本委員会としては、これを基準として研究実践校における事前調査に入ることにした。また、図一 2 は、自己教育力が育成された状態像として作成されたが、同時に「教師が生徒を観察評価する尺度 (評定尺度Ⅰ)」としても使用することにした。次に、評定尺度ⅠのA～Lの項目について、児童・生徒の立場からの自己評価を求めるため、図一 3 のように自己評価票 (評定尺度Ⅱ) を作成した。これは、調査項目の趣旨が子供たちに十分に伝わるよう表現を変えて、小学用、中学用、高等学校用と分け、教師の観察評価と併せて、児童・生徒の内外両面から実態が把握できるように作成したものである。

(担当 中野敏光)